

運動会における「学校ダンス」の現代的意義

The Contemporary Significances of “The School Dance” on the Sports Day

永野 順子 (文化学園大学)

Junko Nagano (Bunka Gakuen University)

安広 美智子 (聖徳大学)

Michiko Yasuhiro (Seitoku University)

Abstract

1、 The purpose of this study is to clarify how “The School Dance” has evolved from its beginning to present-day high schools.

The “Square Dance” was introduced to women’s high schools in the Meiji Era. “Faust,” which was introduced by Akuri Inokuchi from America at the end of the Meiji Era, and “Tokura Dance,” which was instructed in high schools from 1940s to 1950s, derived from “The School Dance.”

2、 Materials for this research were gathered by means of inquiry. In addition, programs of high school sports days in 2010 were gathered. Some school’s home pages were also examined.

Subjects for this research were interviewed on sports days in 2010 and 2011.

3、 Our research revealed four main points.

1) The dance instructors were gymnastics teachers who had used their gymnastics classes to teach “The School Dance.”

2) “The School Dance” taken up by the schools we investigated were ‘Quadrile,’ ‘Faust,’ ‘Minori,’ ‘Tagoto no Tsuki,’ ‘Hanabatake no Ashita,’ and so on.

3) “The School Dance” was practiced in high schools for many years. One reason for this was tradition. Traditional dances continued to be proudly practiced and performed for long time in high schools. Another reason was a yearning from the graduating class, which hoped that “The School Dance” would be performed as a memorial to their last school year. The pupils looked forward to participating in “The School Dance” on sports day.

4) “The School Dance” was ideal for teaching basic dance techniques and contained various expressions. Many pupils were able to communicate with each other through the synchronized movements and enjoy the sense of harmony it brought them.

Traditional dances in high schools were something with which each school could be identified. Furthermore “The School Dance” connected one generation of pupils to the next. These factors make up the educational significance of “The School Dance” in present-day high schools.

キーワード：「学校ダンス」、運動会、教育的意義

はじめに

平成 24 年度より中学校の体育に男女ともに「ダンス」が必修として組み込まれることになった。また、平成 25 年度に移行となる高等学校の新指導要領の中にもダンスの項目が挙げられている。学校教育におけるダンスの意味、あり方が積極的に議論される時が来ているようである。これを機に多様なダンスの形式が再認識され、生徒が抵抗なく受け入れるダンスについての活発な議論が期待される。それは、音楽とリズムを伴う「ダンス」という運動形式が青年に受け容れられ易く、心身の育成にも有効なのではないかと考えられるからである。

目的

昭和 30 年代まで全国の教育現場で盛んに教えられた「教材としての定形のダンス」には明治期に欧米から導入された「方舞」と言われるスクエアダンス系、ボストン体操師範学校の M.B.Gilbert によって考案され、明治後期に導入された「ファウスト」、大正、昭和初期に戸倉ハルによって創作された「戸倉ダンス」の作品群がある。本稿ではこれらのダンスを「学校ダンス」と位置づけた。

西欧化の一端を担う為に鹿鳴館時代に導入された「方舞」は当初は主として公立の高等女学校や華族学校を中心に、「ファウスト」は一部私学の女子高等学校にも受け容れられ、「戸倉ダンス」は公立、私立を問わず広く全国の中学、高校や大学で指導された。

教育現場で再び「ダンス」が取り上げられようとしている現在、かつての「学校ダンス」はどのような形で現代の教育現場に引き継がれているのか、その現代における教育的な意義は何かを探る事が本研究の目的である。

方法

事前調査によって、①中学、大学では教育課程の中に「学校ダンス」はほぼ残っていない、②「運動会」で未だに「学校ダンス」を披露している女子系の高校がある、の 2 点を確認した。

調査対象は、運動会において「学校ダンス」がプログラムに組み込まれていると思われる首都圏の高校(含：中
学併設校)8 校とし、個別に聞き取り調査を行った。聞き取り対象者は主に新旧の体育教師が中心であった。

調査項目は、①指導者について、②採用作品について、③継続理由、④教育的な意義、の 4 点である。調査は統一した調査用紙を使用し、調査者による差が出ないようにした。

また、各高校の 2010 年の運動会(体育祭、体育大会などの名称を含む)のプログラムから「学校ダンス」が組み込まれている状況を確認した。さらに、数校の学校のホームページを参照した。

結果

各学校の運動会における「学校ダンス」の調査の結果を事例別に挙げると以下ようになった。①は指導者、②は採用作品、③は継続理由、④は教育的な意義（聞き取り回答者からの言による）であった。

事例1：都立白鷗高校（中・高） <回答者：旧体育教師>

- ① 昭和22年より61年まで同一教員が在籍し指導した。東京女子高等師範学校卒の教員。現在は体育の教師。
- ② 作品は「カドリール」<白鷗高校は旧 東京府立第1高等女学校、第2高女（現 都立竹早高校）は「ランサース」、第3高女（現 都立駒場高校）は「コチロン」を慣例的に実施していた>。
- ③ 明治37年第1回運動会より「カドリール」が踊られている。戦後は、男女共学となったが、現在では高3女子生徒のみが踊っている。戦後4、5年は卒業生や先生も参加して運動会の最後に踊られ、「カドリールで締める」形式であった。
現在では明治時代から続いたダンスということで学校の誇りとされている。
- ④ 生徒の中に「3年生になったら踊れる」という憧れの意識が生じてきた。子ども世代が入学してきて、世代を超えた親子共通の経験となっている。

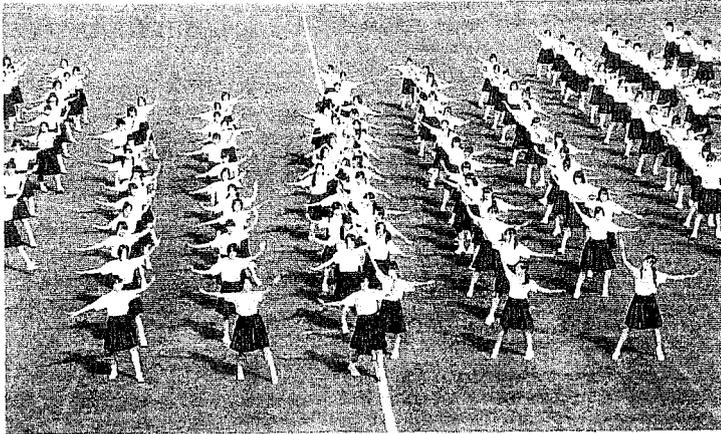
2010年の体育祭におけるプログラムでは、開会式、閉会式を含め31演目中、24番目に「6学年 全女 カドリール」とある。また、1904年(明治37年)の第1回運動会のプログラムには全25演目中、3番目に「クワドリール 第2学年生」、6番目に「ランサース 第5学年生」、13番目に「カレドニアン 第3学年生」、21番目に「コチロン 第4学年生」、24番目に「独逸式クワドリール 第5学年生」とあり、最後に「プロナード 第1学年生・職員卒業生」と記されている（第2回以降の運動会ではさらに最後に「番外 クワドリール 来賓・卒業生・有志生徒」が加わり、昭和20年代まで続いたことが元教諭によって指摘されている²⁾）。東京府立第1高等女学校時代に運動会で多くの「方舞」が踊られていた事を示している。また、最後に「プロナード」で締められている事は現在の東京女学館の体育大会が最後に「カドリール・プロムナード」で締めている形の原型のひとつであると考えられる<明治44年、宇都宮高等女学校の春季運動会のプログラムの末尾には、「プロムネード 生徒全躰」とある⁵⁾>。

事例2：東京女学館（中・高） <回答者：現体育教師>

- ① 歴代の体育教師によってダンスの内容と指導法が引き継がれて現在に至っている。
- ② 作品は高2が「ファウスト」、高3が「カドリール・プロムナード」
- ③ 学校の伝統として根付いている。
- ③ 各ダンスを踊ることが、下級生の憧れになっており「やっとなれる」という声があがる。授業のモチベーションが高くなり、練習にも前向きに取り組んでいる。中学生には戸倉ダンスの基本ステップの練習があり、創作ダンスの際に活用されている。

2010年の体育大会におけるプログラムでは、準備体操と整理体操を含めて全22演目中、17番目に「ダンス『ファウスト』 高二」、21番目に「カドリール・プロムナード 高三」とある。池間は「コチロン -旧制女学校の運動会で踊られた鹿鳴館ダンスの研究-」で「明治女子教育のモデル」として東京女学館を取り上げ、明治40年代の記録にカドリール、カレドニアンの名称が残されている事を指摘している³⁾。

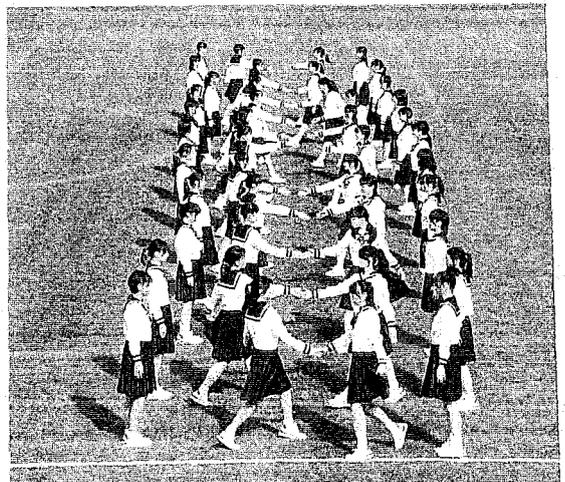
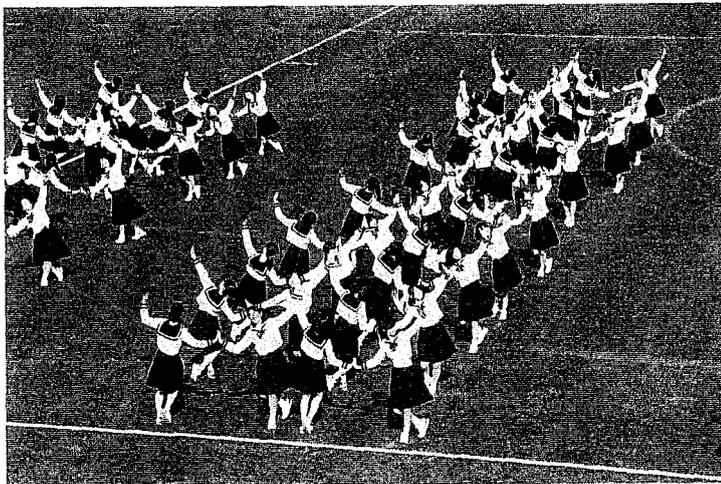
同校は私立の女子高として明治 21 年に開校したが、当時の総理大臣、伊藤博文を創立者として政財界、教育界の有力者の尽力で創建された事から、当初から公立的な校風があったと考えられる。



「ファウスト」2010年 東京女学館



「カドリール」2010年 東京女学館



事例 3：湘南白百合学園（中・高） <回答者：現教頭>

- ① 体育教師が指導
- ② 作品は高 3 の「カドリール」
- ③ 継続に対して疑問視されたことが無く、当然のように踊り継がれ、学園生活の一部になっている。
- ④ 小規模校であり、中高一貫教育をしてきて、最後の学年を納める行事になっている。「カドリール」の 4 人に 1 人は教職員が入るという組み合わせになっていて、全教職員が合流して交流する機会には無い。高校 3 年生にとっては、学園生活最後に教職員との絆を確認する印象深い行事になっている。練習が始まると校内に音楽が流れ、全ての学年が新しい学年暦の始まりを意識する（5 月連休後に体育大会がある）。

歴史の長い学校では、「方踊」を卒業生や教職員と一緒に踊って運動会を締めくくるといったプログラムが組まれてきた。2011 年に創立 75 周年を迎える高校に、このやや古い形式が今でも残っていて、学生は制服、教職員は背広、スーツで胸にコサージュを着けて「方舞」の雰囲気表現している（教職員の服装は生徒からの希望）。

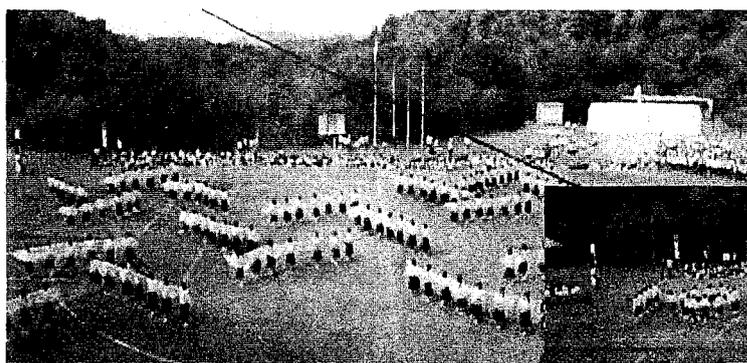
例4：北鎌倉女子学園（中・高） <回答者：現体育教師>

- ① 歴代の体育教師が指導。昭和49年より同一教員が指導し、現在に至っている。日本女子体育大学卒の教員。
- ② 作品は高1「田毎の月」、高2「メイポールー菌の花」、高3「カドリール」
- ③ 学校の伝統として継続されている。作品の完成度が高く、難しい動きはないが、華やかで見ごたえのある作品であると評価されている。
- ④ 生徒達は練習を重ねる中で、集団の中における自分を発見し仲間意識が芽生える。時間をかけて学んだことが習得力を高め、その後ダンス授業に反映されている。

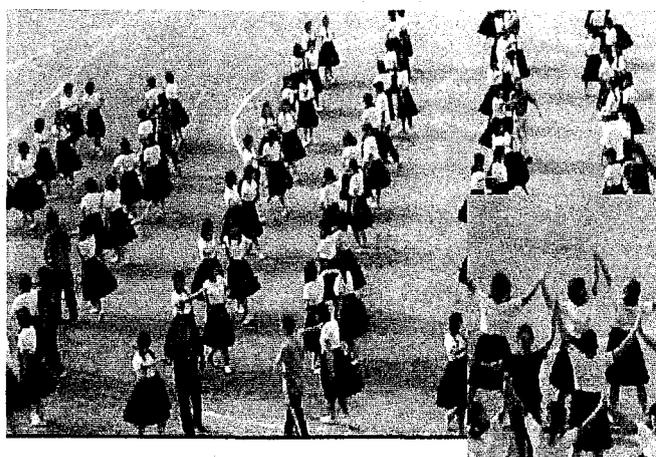
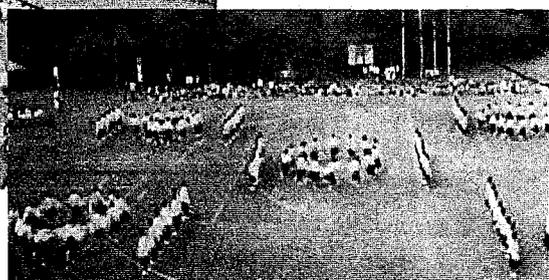
2010年の体育大会におけるプログラムでは、全24演目中10番目に「ダンス『田毎の月』 高1全員」、最後の24番目に「ダンス『カドリール』 高3全員、職員」とある。伝統的な「カドリール」を最終学年生と職員で最後に踊り、動的な「戸倉ダンス」を1年生が午前中に踊るように構成されている。

「戸倉ダンス」が全国規模で伝えられ、広まった背景には運動会における華やかさの演出に効果的であったことが指摘されているが、「学校ダンス」の集団性、表現性と効果を十分に体現した体育大会であったと思われる。

本稿で対象とするジャンルではないが、21番目に「ダンス『メイポールー菌の花』 高2全員」が入っている。演出性の高いダンスを2年生が終盤で踊ることで、鑑賞者を巻き込んで大きく盛り上がるプログラムになっていることがわかる。「メイポールダンス」はフォークダンスであるが、集団がいっせいに動きを合わせることで完成し、華やかなりボンの動きが加わることで運動会の演目にふさわしいと考えられ、現在でも実践女子学園の運動会で中学3年生の、自由学園の体操会で女子部(中・高)の演目となっている。



「田毎の月」2010年 北鎌倉女子高校



「カドリール」2010年 北鎌倉女子高校



事例5：県立千葉女子高校 <回答者：現体育教師>

- ① 体育教師が6、9月の体育の授業時間に指導している。
- ② 作品は高2が「花畑の朝」、高3が「ファウスト」
- ③ 「花畑の朝」は昭和40年からだが、「ファウスト」は創立間もない明治期より伝えられてきたと考えられている。代々の体育科教員が伝えてきた。
- ④ 「花畑の朝」はクラス創作部分があり、集団の動きをひとりひとりが考えて踊ることも大切である。また、協力、交流、団結の目的もある。「ファウスト」は戦前から最高学年で習うことになっており、卒業記念ダンスとして位置づけられている。また、平成元年の全国高等学校体育研究大会で公開演技として発表されている。

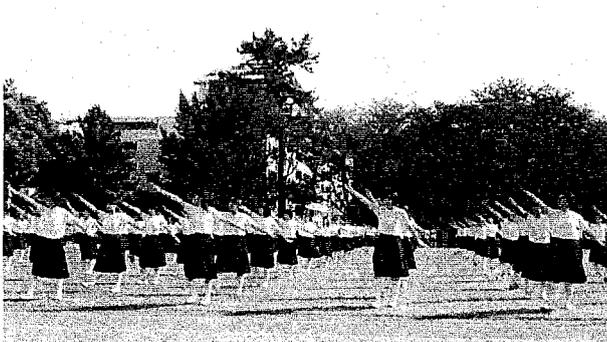
2010年の体育祭のプログラムには13の演目があり、14番と15番にそれぞれ「花畑の朝、2年全員」、「ファウスト、3年全員」として「学校ダンス」が登場している。

当校は明治33年に千葉県高等女学校として発足し、一時共学校に改組され、再度女子高となった経緯がある。古い歴史を有する名門校であるが、「ファウスト」が明治時代に踊られ始めるのに対し、「花畑の朝」が昭和に始まるのはこうした学校の歴史によると考えられる(昭和36年女子高に戻る、昭和40年「花畑の朝」を2年生の踊りに採用)。教員の転任が多い公立高校という条件下で今日まで伝統を伝え続けているのは教員の熱意と伝統への誇りである。同校のホームページには「体育祭」の項に「3年生のマスゲーム『ファウスト』や2年生の『花畑の朝』は近隣の方も見学に訪れるほど有名です」とある。「学校行事の中にある意味は？」との質問に対し担当教員は「本校体育祭は、保護者、卒業生、一般の方々等400名近い参観があり『みせる』体育祭という点では意味があるかもしれない」と回答している。



「花畑の朝」2011年 千葉女子高校

「ファウスト」2011年 千葉女子高校

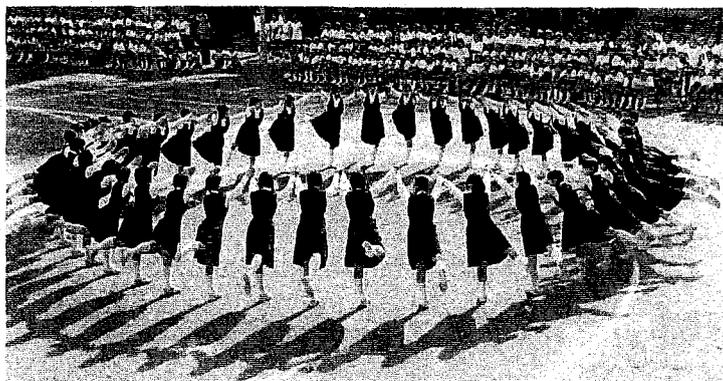


事例6：横浜雙葉学園(中・高) <回答者：現、副校長>

- ① 高3を担当する体育教師、男性の場合もある。初代は戸倉ハルの元で直接習得してきた。
- ② 作品は高3で「田毎の月」
- ③ 音楽の美しさと動きの優雅さがあり中高一貫教育の最終学年として6年間を振り返る機会である。体育祭は高3の保護者のみに公開しており、その前で踊ることは卒業学年の象徴であり下級生の憧れの的である。
- ④ 他の学年が個々の動きでダンスを踊るのに対し、高3は「田毎の月」をクラス全員が輪になって踊る。その一体感の中で、相互の顔を見ながら6年間を思い出す印象的な場になっている。クラスの一体感や協調性を養っている。長い間、一貫して変わらない行事の一つとして、伝統を再確認する場でもある。

「田毎の月」 2010年 横浜雙葉高校

ホームページの学校の歴史の中に「1950年 創立50周年・「田毎の月」始まる」とある。また、体育祭の中に「学園生活を締めくくる高3のダンス『田毎の月』」ともあり、重要な行事として位置付けられていることが推測される。横浜大空襲の後、焼け野原の運動会で踊り始められた。戦後に新しい伝統を創出するダンスとなった。



事例7：桜蔭学園(中・高) <回答者：現、元教師>

- ① 体育教師が指導。現在は日本女子体育大学卒の教員が主体となって教えている。
- ② 作品は高3で「みのり」、中3で「マズルカ」
- ③ 伝統を重視する校風があり、お茶大とのつながりから、戸倉作品を大切にしている。保護者に対して成長した姿を披露する機会になっている。
- ④ 最高学年になる自覚ができ、動きや意識に落ち着きが見られるように観察される。

2010年の体育大会におけるプログラムでは、全26演目中、8番目に「ダンス『マズルカ』中3」、23番目に「ダンス『みのり』高3」とある。いずれも「戸倉ダンス」を採用している。桜蔭学園が創立時よりお茶の水女子大学と深くつながっていた事から伝統的に「戸倉ダンス」が指導され、学園全体に認知され誇りとなっている。

「みのり」 2011年 桜蔭学園高校



事例8：豊島ヶ岡女子学園（中・高） <回答者：現体育教師>

- ① 歴代の体育教師が指導。主として日本女子体育大学卒の教員とお茶の水女子大学卒の教員。
- ② 作品は「みのり」（授業では、これ以外の戸倉ダンスも教えている）
- ③ 体育の授業で「みのり」（高校3年、1学期）など戸倉ダンスを指導。運動会の各学年のダンス発表作品として高校3年生が「みのり」を選択する年にはプログラムに採用。
- ③ ダンスの基本要素が作品の中に入っており、ダンス教材としての価値が認められる。

2010年の運動会において「学校ダンス」は採用されなかった。体育の授業では「みのり」以外の「戸倉ダンス」も教えられており、運動会が「戸倉ダンス」の発表の場であった時代もあったが、運動会の主体者が教員サイドから生徒会主導へと移行するに従って、生徒の嗜好が優先されるようになった。

考察

わが国の女学校の運動会は明治30年代から組織的に実施されるようになった。興水は女子高等師範学校附属高等女学校の運動会におけるダンスの歴史を報告している⁵⁾が、その中で最も早くから採用され、最も多く踊られた「カドリール」と、井口阿くりの帰国後、明治40年以降に加わった「ファウスト」が今日まで運動会で踊り継がれている2作品であった。

戸倉ダンスの集团的要素を含む「みのり」「田毎の月」などの作品が、かつては運動会に華を添える大規模なダンスとして踊られたが、首都圏の数校では現在も運動会において踊り継がれていた。

明治時代に学校教育に導入された「カドリール」、「ファウスト」、戸倉ハル作品の「みのり」「田毎の月」「花畑の朝」と緩和な運動で品位のある作品が採択され、それぞれに踊りの心が受け継がれていた。集団行動を忌避する傾向の強い高校生を対象に、動きの形だけでなく作品に込められた心を伝え、指先の細部まで指導する教師の責務、負担はますます重いと推測された。

運動会におけるダンスの指導は体育教師であり、指導者が替わることで、継続が困難となり中断してしまった学校があった（浦和第1高等女学校がその例である）。そのため、今回の調査範囲では、主として転任がない私立の女子校に伝統のダンスが受け継がれている傾向がみられた。より多くの高校を調査することが今後の課題である。「戸倉ダンス」に関しては、戸倉ハルが在職したお茶の水女子大学、日本女子体育大学の卒業生がそれぞれの高校で指導の中心者として情熱を傾けていた。後の世代の教師の場合は奉職高校の伝統として先任教員から指導法や作品を受け継いで教えていた。

運動会の主体者が生徒会に移行することで、生徒の理解を得て継続できるかが一つの課題であった。都立白鷗高校の「創立百周年記念誌」に元教諭の林が「“カドリール”をつづけてきて」と題する一文を寄せている。文中で「体育祭実行委員会からは『古くさいからプログラムから外したい』との申し入れも何度かありました。そのつど『先輩たちの心に深く残っている“カドリール”、“第一”から“白鷗”へと何十年も続いているものは大事にしたい』とプログラムの最後を飾る事はできなくとも、演技の中の一つとして残してきました。』²⁾と記している。一方、都立駒場高校の同窓会、駒場松桜会のホームページには、駒場高校における「コチロン」の歴史がつづられている。「高校教育の指導要領の変更で、体育実技の時間が減らされることにより、コチロンの時間が少な

くなった。ついに 1965 年、運動会が生徒会が行う体育祭となり、コチロンはプログラムから消えた。」とある。と同時に、今では同窓会が独自の会を立ち上げて、活発に踊っている様子も記されている（教育現場を離れたところでも「学校ダンス」が存在感を示しうる新しい姿を示唆している）。

また、前出の「“カドリール”を続けてきて」には、新制高等学校になり共学化した時に本来男女ペアで踊るべきダンスを男子が照れて覚えようとせず、女子のみで踊る事となった経緯も記されている。共学化も、伝統の一部を中断させる契機になると考えられる。上野学園がそれまで運動会で「カドリール」を公開していたが 2006 年共学化を期に中断しているのがその例である。千葉県立千葉女子高校の場合は、千葉県高等女子学校として発足(明治 33 年)し、一時共学校に改組され(昭和 24 年)、再度女子高となった(昭和 36 年)経緯がある。運動会で現在の「花畑の朝」を採用したのは女子高に戻ってから(昭和 40 年)である。女子高としての新しいアイデンティティの確立に一役を担ったのではないかと考えられる。

「学校ダンス」が継続し続けるには、継続による伝統化が重要な要素であった。都立白鷗高校では「明治期より踊り継がれている」ことが価値ある事として今日では周囲に理解されている。県立千葉女子高校の場合も担当教員が入れ替わる公立高校であるが「伝統」によって作品と指導法が引き継がれている。東京女学館のホームページには「東京女学館の伝統の象徴『カドリールとプロムナード』」のページがあり、伝統を具体的に表現し、世代を超えた絆を確認する役割が付与されている事がわかる。現教諭の渡壁は「東京女学館における学校ダンスの指導内容と教育上の効果」⁸⁾において「本校のアイデンティティのひとつであるといっても過言ではない」また、「本校の伝統を形作る上でも重要な位置づけにあるといえる」と記している。

興水は 1988 年に発表した「方舞百年」の中で、「消長を繰り返しながら一世紀を越えて現在に至っている」理由を 4 点に要約している⁹⁾が、その 3 番目に「伝統のもつ力も大である。運動会のプログラムの最後を飾る最上級生の方舞、また、教師、生徒、卒業生が一団となって親しみあう方舞は、それぞれの学校の伝統となって、踊り継がれてきた」とある。本稿が「現在」に焦点を当てて論じているのに対して「百年」の歴史を俯瞰して論じているという視点の相違はあるが、「伝統」に内在する価値の重さが「現在」を動かすことを示している。

「学校ダンス」に対する生徒の受け止め方、受け容れ方も重要である。多くの教育現場から指摘されたことは、そのダンス作品を運動会で披露できることが上級学年の象徴となっていて、下級生の憧憬の的になっている事である(県立千葉女子高校のプログラムには卒業ダンスと表現され、横浜雙葉学園のホームページには学園生活を締めくくる高 3 のダンスと紹介されている)。また、運動会は上級学年となり成長した生徒の姿を保護者に披露する場にもなっているとの指摘もあった(桜蔭学園)。生徒の憧憬の念は練習に対するモチベーションの高さに現れ、教育上の効果を上げるのに有効である。前出、東京女学館の渡壁は、授業に対する集中力の高まりを指摘している。

ほとんどの高校で体育の授業時間を使って指導されていた(都立白鷗高校ではその点が問題視された時期があった)。導入として戸倉ダンスの基本ステップが使われ、教育効果をあげていた(東京女学館)。また、戸倉ダンスの作品に基本要素が入っていて、教材としての価値が高いという評価もあった(東京女学館、豊島が岡女子学園)。さらに、作品を仕上げるために表現性を高める必要があり、繊細な身体表現を身につけさせる機会となった(豊島が岡女子学園、桜蔭学園)。生徒にとっては、アップテンポではないダンスに触れる機会になるとの指摘もあった(桜蔭学園)。また、それを生徒が抵抗なく受け容れていた。「学校ダンス」は定型のダンスであり、リズム

ミカルなダンスではないが、教材としての価値が認められ、個性、創造性を重視する創作舞踊の表現の一部にも活かされていることが示唆された。

また、「ヒップホップは踊れても、スキップは出来ない」という現役教員の声に代表されるように、今日では、身体の軸を意識したり、身体を上方向に引き上げる感覚が育っていない生徒が多く（重心を下げることは巧みである）、動作教育の基礎を習得させる教材となっている。さらに、一定のリズムの中で、他者と同調した動きを習得させる機会は、単なるダンス教育を超えて姿勢と規律の教育にもつながっていると推測される。その点が教員の難しさであり、学校側が期待する教育上の意義の一つなのではないかと考えられる。

今回調査したほとんどの高校が中学校を併設しており、戸倉作品には中学生対象のダンス作品も多いが運動会で踊られているのは高校生の2、3年が主体であった。「学校ダンス」が上級学年のシンボルとされていることもあるが、中学生の成熟段階では難しいとの判断があると考えられる。

文化女子大学体育学研究室（現、文化学園大学）が昭和40年に編んだ文献目録¹⁾によると、昭和30年代に「学校体育」(16)「女子体育」(4)「体育科教育」(4)「新体育」(2)に取り上げられた「運動会のダンス」に関する記事は具体的な作品解説も含めて26件ある（括弧内は件数）。この時代は運動会で公開演技される集団ダンスがテーマとして頻繁に取り上げられる存在であったことが推測される。現在では「運動会」が「体育大会」「体育祭」に名称を変え、教員や生徒、社会背景が変動し、大学の体育教育における定型ダンスへの取り組みが無くなったことで存在感を消してしまっている。しかし、女子系高等学校の数校においていまだに継承されている事実は昭和の前半に「運動会のダンス」が非常に大きな存在であったことが遠因であると考えられる。その影響力が、現代の時代背景の中でその存在意義を変えながら現在に伝えられていると思われる。卒業生、保護者（卒業生の場合も多い）にも学校の誇りとして受け容れられているのは、世代を貫く長き伝統や学校のアイデンティティを表現する手段として定型ダンスが再評価されているとも考えられる。

興水の論文「方舞百年」は「時代の推移と共に、自ずから様相を変えてきた方舞が、このまま盛んに踊り継がれていくか否かは定かではないが、明治期から受け継がれてきた、踊りを楽しみ、生きる喜びを見出す精神は、現在、未来まで受け継がれていくことであろう。」と結ばれている。

社会背景の変化、人々の意識の変化と共に、教育に求められる役割も変わってゆく。その中で「学校ダンス」はどのような役割を担ってゆくのか。「現代」に視点を定めて、教材としての新しい価値を模索してゆくことから今後の継続につながる手がかりが生まれるのではないかとと思われる。

まとめ

明治期より昭和30年代まで教育現場で指導された教材としての定型のダンスを「学校ダンス」と位置づけ、これらのダンスが現代の教育現場、とりわけ運動会（含：体育祭、体育大会など）にどのような形で継承されているのかを探り、首都圏の女子系高校の8校を対象にその教育的意義を検証した。

①指導者は体育教師であり、戸倉ハルが奉職した、お茶ノ水女子大、日本女子体育大の卒業生あるいはその継承者であった。今回の調査では、主に教師の転任による断絶が無い私立の伝統的な女子高に継承される傾向があった。体育の授業時間を練習に当てていた。

②採用作品は、「カドリール」、「ファウスト」、「みのり」、「田毎の月」、「花畑の朝」であり、中学では中学併設

校の桜蔭学園のみが「マズルカ」を採用していた。

- ③継続理由は、伝統化され、周囲が意義を理解している。上級学年の象徴になっていて、下級生の憧憬の的になっている。生徒の抵抗感がない。継承されるに足るだけのダンス作品の高い完成度。
- ④教育的な意義として作品完成までには時間を要するが、基本技術の習得の為の優れた教材である。多様なダンス表現を習得させる事ができる。集団性の共有（コミュニケーション）を目指すことが可能な教材である。学校の伝統やアイデンティティを共有することができる。

謝辞

本研究をすすめるにあたり、東京女学館の渡壁和子先生をはじめ、聞き取りにご協力下さり、資料、写真を提供して下さった旧・現教職員の皆様、多大なご助力を下さった同窓会、関係者の皆様に深く感謝申し上げます。

参考文献

- 1) 文化女子大学体育学研究室：研究報告 第1巻 1965年
- 2) 林 きぬ子：「"カドリール"をつづけてきて」創立百周年記念誌 都立白鷗高校 1988年
- 3) 池間博之：「コチロン -旧制女学校の運動会で踊られた鹿鳴館ダンスの研究-」日本女子体育大学 2000年
- 4) 池間博之：「歴史的舞踊の系譜」6 -鹿鳴館の舞踏- 日本女子体育大学 1998年
- 5) 興水はる海 和気千恵子：「明治期における女学校の運動会 -高齢者へのアンケートから-」学校体育とスポーツ促進運動の歴史 国際体育スポーツ史東京セミナー大会組織委員会 1981年
- 6) 興水はる海：「方舞百年」：お茶の水女子大学人文科学紀要 41 95-117 1988年
- 7) 松本千代栄 岡野理子：「大正・昭和前期の舞踊教育」舞踊学第8号 1985年
- 8) 渡壁和子：「東京女学館における学校ダンスの指導内容と教育上の効果」未発表